

●妙悟空著『人間革命』 獄中の悟達

『ああ、判りたい！ 法華經の真理を知りたい！』

もはや、巖さんの念頭に、壊滅に瀕している事業のことも、釈放の願いも、帰宅の焦りもなくなって、法華經の真理が掴めないでいる……おのれの鈍根にいら立って、幾度、頭を打ったことか。夜は寝苦しく、覚めれば烈しい悶えがつづいた。(中抜)

十一月中ごろの、水のように空が晴れている……ある朝のこと、巖さんの題目を唱えている声が独房から洩れていた。もしも、鉄の扉の前に立って、朝々、声に聞き入る人があったら、彼の唱題している声から挑みかかるような烈しさが消えて、静かに澄んできているのに気が付いたであろう。

日夜、苦悶をつづけて、今は疲労のどん底にいるのだが、法華經と取り組んで熱烈に思索し、深く瞑想し、苦悶をつづけることによって、心の濁りや身体の錆(さび)が落ちてきたとはいえないであろうか。

『南無妙法蓮華經……南無妙法蓮華經……』

東の空へ昇った太陽が独房の窓へ射し込んで、牛乳びんの丸いふたでこしらえた数珠を手にして、巖さんの額や鼻のあたりを琥珀色に染めており、時々陽射しを跳ねてメガネが光っている。今年になって数えはじめた題目は、百八十万遍を超えている。(中抜)

巖さんの心は、今、春の野を吹く微風のように軽く柔らかくて譬えようもなく平和であった。夢でもない、現(うつ)つ)でもない……時間にして、数秒であったか、数分であったか、それとも数時間であったか……計りようがなかったが「彼は数限りない大衆と一緒に虚空にあって、金色燦爛たる大御本尊に向かって合掌している自分を発見した。

そして、法華經二十八品の内の従地涌出品にある『この諸々の菩薩、釈迦牟尼仏の所説の音声聞いて、下より発来せり。一一の菩薩、皆これ、大衆の唱導の首なり。おのおの六万恒河沙等の眷属を將いたり……』(中抜)

彼は經文通りの世界にいることを意識している。巖さんはこの大衆の中の一人であって、永遠の昔の法華經の会座に連なっているのであり……(中抜)これは、嘘ではない！ 自分は今、ここにいるんだ！ 彼は叫ぼうとした時、独房の椅子の上に座っており、朝日は清らかに輝いていた。

巖さんは一瞬茫然(ぼうぜん)となったが、歡喜の波がひたひたと寄せてきて、全身はもまれ、しびれるような喜びが胸へつき上げてきて、両眼から涙が溢れだし、袂(たもと)をさぐってハンカチを取り出して、メガネを外して押さえても、堰(せき)を切ったように涙が湧いてとめどがなく、彼は肩を震わせて泣きつづけた。(おお！ おれは地涌の菩薩ぞ！ 日蓮大聖人が口決相承を受けられた場所に、光栄にも立ち会ったのだぞ！)……(中抜)

彼はメガネの内でも幾度となくまたいたが、今、眼の前に見る法華經は、昨日まで汗をしばっても解けなかった難解の法華經なのに、手の内の玉を見るように易々(やすやす)と読め、的確に意味がくみ取れる。それは遠い昔に教わった法華經が憶(おも)い出されてきたような、不思議さを覚えながらも感謝の想いで胸がいっぱいになった。

●小説『人間革命』第4巻 生命の庭 獄中の悟達

十一月中旬、元旦から決意した唱題は、すでに二百万遍になろうとしていた。

そのようなある朝、彼は小窓から射しこむ朝日を浴びて、澄みきった空に、澄みきった声で、朗々と題目をあげていた。

彼は、何を考えていたのだろうか。何も考えていなかった。壊滅に瀕している事業のことも、早く釈放されたいという焦慮も、困窮しているであろう妻子のことも、おなじ獄舎にいる老体の師、牧口常三郎のことも、この時の彼の念頭からは、すべて消えていた。あえていうならば、ここ数日、再三読みかえしている法華經の從地涌出品第十五だけが、頭の片隅に残っていた。

陽は暖かかった。春を思わせるような微風が、彼の頬をなでた。ほのぼのとした喜びが、どこからともなく湧いてくる。一切の苦悩を洗いながしていくような、清浄で平穩な、それでいて無量の感動に包まれているのであった。

——是の諸の菩薩、釈迦牟尼仏の所説の音声を聞いて、下より発来せり。——の菩薩、皆是れ、大衆の唱導の首なり。各六万恒河沙等の眷属を將いたり。況や五万、四万、三万、二万、一万恒河沙等の眷属を將いたる者をや。況や……

彼は自然の思いのうちに、いつか虚空にあった。数かぎりない、六万恒河沙の大衆の中であつて、金色燦然たる大御本尊に向かって合掌している、彼自身を発見したのである。

夢でもない、幻でもなかった。それは、数秒であつたようにも、数分であつたようにも、また数時間であつたようにも思われた。はじめて知った現実であつた。喜びが全身を走り、——これは嘘ではない、おれは今ここにいる！ と、自分で自分に叫ぼうとした。その時、またも狭い独房の中で、朝日を浴びて坐っている我が身を感じたのである。

彼は一瞬、范然となった。両眼からは熱い涙が溢れてならなかった。彼は眼鏡をはずして、タオルで抑えたが、堰を切った涙はとめどもなかった。おののく歡喜に全生命をふるわせていた。

彼は涙のなかで、「靈山一会、儼然未散」という言葉を、ありありと身で読んだのである。彼は何を見、何を知ったというのであろう。

——此の三大秘法は二千余年の当初、地涌千界の上首として、日蓮慥かに教主大覺世尊より口決相承せしなり……

彼は狂喜した。彼はこれまで、日蓮大聖人の三大秘法稟承事を拝読するごとに、いつもこの「口決相承」とは何か、と頭を悩ませてきた。だがここに、なにも不思議でないことを、ついに知ったのである。

——あの六万恒河沙の中の大衆の一人は、この私であつた。まさしく上首は、日蓮大聖人であつたはずだ。なんという莊嚴にして、鮮明な、久遠の儀式であつたことか。してみれば、おれは確かに地涌の菩薩であつたのだ！

彼は、狭い部屋を、ぐるぐる歩きまわっていた。そして机に戻ると、ふたたび涌出品から読みはじめたのである。

彼は机をたたきながら、「この通りだ。このとおりだ」と、深く頷いた。

さらに寿量品に進み、つぎつぎと八品を読みすすんで、囑累品にいたつた。各品の文字は、急に親しさに溢れ、訴えてきた。まるで、昔書いた手帳を読みかえす時のように、曖昧であつた意味が、いまは明確にくみとれるのである。

彼は、わが眼を疑った。だが、法華經を、このように理解するにいたつた我が心の不思議さは、いささかも疑わなかった。

激しい、深い感動のなかで、彼は我が心に言った。

——よろしい、これでおれの一生は決まった。きょうの日を忘れまい。この尊い大法を流布して、おれは生涯を終わるのだ！

彼は同時に、わが使命をも自覚したのである。そして、来し方を思い、はるかな未来を望みながら、彼はいま四十五歳であることを念った。

年齢が思いうかぶと、彼も明治に育った人らしく、……孔子が生涯をかえりみて、弟子のために、年齢と思想との理想的な調和を十年単位で説いた図式が、念頭に浮かんだ。

——四十ニシテ惑ハズ、五十ニシテ天命ヲ知ル。

四十五歳の彼は、そのどちらでもない。しかし、いまの彼は、この二つを一時に知覚したのである。

彼は大股に歩きまわりながら、なにものかに向かって叫んだ。

「彼に遅ること五年にして惑わず、彼に先だつこと五年にして天命を知りたり」

この叫び声を聞きつけた看守の一人は、怪訝な面持で、戸田城聖の独房を、じっと覗いて立ち去った。

ちょうど同じ頃、別棟の独房では、牧口常三郎会長が、ひとり病んでいた。老齢による衰弱である。一年半にわたる獄中での栄養失調がそれに加わり、昭和十九年十一月十七日、みすがら病監に移り、翌十八日、安詳として七十三年の崇高な生涯を閉じたのである。

戸田城聖が、恩師の死を知ったのは、五十二日目の翌二十年一月八日のことであった。その日、彼は予審廷で、一人の予審判事から、牧口の死を知らされたのである。

彼は慟哭した。身も世もなく悲しみ悼んだ。そして、一滴の涙も涸れつくすまで泣いた。しかし、すでに我が身の重い使命を自覚していた彼は、広宣流布という大業によって、この仇は必ず討ってみせると我が心に誓った。

●小説『人間革命』第5巻 烈日 路上の悟達

戸田はこの頃、天啓というより他にない、不思議な瞬間をもった。——二月初旬の厳寒の日である。風はなかったが、凍りつくような寒さが、吐く白い息にみられた。

日暮れに近い午後、戸田はひとり事務所を出て、すたすと駅の方へ足を運んでいった。空は妙に赤らんで明るく、冬にはめずらしい夕焼けである。吐く息は白いのに、彼はなぜか寒さを感じない。空はあくまでも異様に明るく思われるのであった。まるで夏の夕空と違ってよい。

彼は、奇異な思いに駆られたのであろう。——空の遠くへ眼を放った時、彼の胸は急に大きな広がりをもったように、それがそのまま空へ空へと、みるみる広がっていくような思いがした。その途端、燦爛たる世界がにわかになんかを包んだのである。彼の脚は、平静に地上を踏んでいて、なんの変化もなかったが、彼は見た。そして瞬間に思い出した。——あの牢獄で知った喜びの瞬間を……いままた彼は体験したのである。

彼の生命は、虚空に宇宙的な広がりを持ち、無限の宇宙は、彼の胸の方寸におさまっていた。彼は心で唱題し、おさえがたい歓喜に身をふるわせた。生命の輝くばかりな充実感を自覚したまま、遍満する永遠の一瞬を苦もなく感得したのである。

彼は、ふと立ちどまり、あたりを見わたした時、灰色の街路と、侘しい家並みと、背を丸くして道ゆく人々が目についた。彼は、われに還ったものの、いま全生命に知った実感は消えることなく、彼の胸の底で燃焼していたのである。そして、一切の羈絆のことごとくが、洗い流された

ように、彼の頭から消えていった。彼は口には出さなかったが、心でいくたびも繰り返していった。

「ありがたい。なんとありがたいことか！ おれは厳然と守られている。おれの生涯は、大御本尊様をはなれては存在しないのだ」

黄昏に近い、あわただしい路上である。夜学に急ぐ学生たちが、後から後から群れをなして、彼とすれちがっていった。

この日から数日後のことである。大蔵省の内意が、清算中の信用組合に通達されてきた。組合員の総意がまとまるものならば、組合を解散してもさしつかえないというのである。——してみると、戸田専務理事への責任追及は、ひとまず終わったとみてよい。組合の解散が可能ならば、戸田に対する法律的責任も、自然解消ということになるではないか。

事態は大きな変貌を示しはじめた。暗雲のなかに、一条の力強い光線が見えはじめたのであった。

昨年八月下旬以来、疾風怒濤と秋霜の真っ只中であつた、あの苦しい月日は、いったい悪夢の年月であつたのだろうか。国法による法律的制裁が、まったく不可避のものとして、あれほど絶望的な様相をおび、戸田城聖の一身にふりかかろうとしていたのだ。国家の法律の適用を曲げることはできない。戸田よりも、顧問弁護士たちが匙を投げていた事件である。では、なにがそのような幸運な決定をもたらしたのか。

——戸田には、いまそれが、はっきりと解っていた。

「無量義とは一法より生ず」——最高の因果の法則は仏法である。一切の因果の法則の根本は仏法にある。したがって、「**仏法、かならず王法に勝れる**」ということの**確かな頭証を、戸田は身をもって知った**と**いってよい**。日蓮大聖人の仏法のすごさは、戸田を救ったが、また同時に彼の使命の重大さを警告したのとも思えた。

彼は後顧の憂いが消滅したことを知ると、その残された生涯における使命達成への決意を強く固めたのである。はや、逡巡とも、怯懦とも、偷安とも訣別しなければならなかった。ここに、彼の最後の死の日にいたるまでの道程は、決定されたのである。

●『創価学会の歴史と確信』（『大白蓮華』昭和26年7月） 路上の悟達 広布大願の大御本尊
以上のように、学会活動は消極的であつたことは、いなまれないのである。

しかるに、日本の国は滅びている。日本の民衆は、悩みに悩んでいる。学会は当然、立たなければならないのである。

学会再発足のとき、立正交成会も同じく小さな教団として、やっと息をついていたのは、自分たちのよく知っていることである。しかるに、七か年の時を経過して、かれは大なる教団となって邪教の臭気を世にばらまいている。大聖人の真の仏法を奉持して邪宗ののさばるにまかせているのは、だれの罪かと私は自問した。

「これは創価学会を率いる者の罪である」と自答せざるをえないのである。

また自分は、文底唯一の教理を説いていると深く信じているが、教本には文上の法華經を用いている。

この二つの罪は、御本仏の許すべからざるものである。私は大難をうけたのである。立つべき秋に立たず、つくべき位置につかず、釈迦文上の法華經をもてあそぶ者として、大謗法の罪に私は

問われたのである。ありがたや、死して無間地獄うたがいなき身が、御本尊の功德はありがたく、現世に気づくことができたのである。

私は、悩みに悩みとおしたのである。理事長の位置を矢島周平氏にゆずり、敢然と悩みのなかに突入したのであった。「**転重軽受法門**」のありがたさ、「兄弟抄」の**三障四魔**のおことばのありがたさ、泣きぬれたのであった。

兄弟抄の御おおせには、

「其上摩訶止観の第五の巻の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし、此の法門を申すには必ず摩出来すべし魔競はずは正法と知るべからず、第五の巻に云く『行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ』等云云、此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ」（御書全集一〇八七ページ）と。

以上の二つの法門を身に読ましていただいた私は、このたびは路上において、「**靈山一会の大衆儼然として未だ散らず**」して、私の身のなかに、永遠のすがたでましますことと、拝んだのであった。

私は歡喜にもえたのである。私は証のありしだい敢然立つことを決意したのである。

なぜ、こんなに、私は会長たることをいやがったのであろうか。私自身、理解のできない境地であった。いまにしてこれを考えると、もっともなことであるとも思われる。創価学会の使命は、じつに重大であって、創価学会の誕生には深い深い意義があったのである。ゆえに、絶対の確信ある者でなければ、その位置にはつけないので、私にその確信なく、なんとなく恐れをいただいたものにちがいない。

牧口会長のあの確信を想起せよ。絶対の確信に立たれていたではないか。あの太平洋戦争のころ、腰抜け坊主が国家に迎合しようとしているとき、一国の隆昌のためには国家諫暁よりないとして、「日蓮正宗をつぶしても国家諫暁をなして日本民衆を救い、宗祖の志をつがなくてはならぬ」と儼然たる命令をくだされたことを思い出すなら、先生の確信のほどがしのばれるのである。

いまの私は不肖にして、いまだ絶対の確信はなしといえども、大聖人が御出現のおすがたをつくづく拝したてまつり、一大信心に立って、この愚鈍の身をただ御本尊に捧げたてまつるという一法のみによって、会長の位置につかんと決意したのである。この決意の根本は前に述べたごとく、深い大御本尊のご慈悲をうけたことによる以外に、なにもないのである。この決意をもたらすや、理事長矢島周平氏はじめ和泉、森田、馬場、柏原、原島、小泉、辻などの幹部、および青年部諸氏の会長推戴の運動となって、五月三日、私は会長に就任したのであった。

私は学会の総意を大聖人の御命令と確信し、矢島理事長の就任とともに、会の組織をあらため、折伏の太行進の命を發したのである。

ここにおいて、学会は発迹顕本したのである。顧みれば、昭和十八年の春ごろから、故会長が、学会は「発迹顕本しなくてはならぬ」とログセにおおせになっておられた。

われわれは学会が「発迹顕本」ということは、どんなことかと、迷ったのであった。故会長は、学会は発迹顕本しなくてはならぬと、この発迹顕本の実事をあらわさないことは、われわれが悪いようにいうのであった。みなは私同様、ただとまどうだけで、どうすることもできなかった。

昭和二十年七月、出獄の日を期して、私はまず故会長に、かく、こたえることができるようになったのであった。

「われわれの生命は永遠である。無始無終である。われわれは末法に七文字の法華経を流布すべき大任をおびて、出現したことを自覚いたしました。この境地にまかせて、われわれの位を判ずるならば、われわれは地涌の菩薩であります」と。

この自覚は会員諸氏のなかに浸透してきたのであったが、いまだ学会自体の発迹顕本とはいえないので、ただ各人の自覚の問題に属することにすぎない。

しかるに、こんどは学会総体に偉大な自覚が生じ、偉大なる確信に立って活動を開始し、次のごとく、牧口会長にこたえることができたのである。

「教相面すなわち外用のすがたにおいては、われわれは地涌の菩薩であるが、その信心においては、日蓮大聖人の眷属であり、末弟子である。三世十方の仏菩薩の前であらうと、地獄の底に暮らそうと、声高らかに大御本尊に七文字の法華経を読誦したてまつり、胸にかけた大御本尊を唯一の誇りとする。しこうして、日蓮大聖人のお教を身をもってうけたまわり、忠順に自業化他にわたる七文字の法華経を身をもって読みたてまつり、いっさいの邪宗を破って、かならずや東洋への広宣流布の使徒として、私どもは、故会長の意志をついで、大御本尊の御前において死なんのみであります」

この確信が学会の中心思想で、いまや学会に瀰漫しつつある。これこそ発迹顕本であるまいか。この確信に立ち、学会においては、広宣流布大願の「曼陀羅」を、六十四世水谷日昇上人にお願い申しあげ、法主上人におかせられては、学会の決意を嘉みせられて、広宣流布大願の大御本尊のお下げわたしをいただいたのである。

七月十八日、入仏式をいとなみ、七月二十二日、学会全体の奉戴式が九段一口坂の家政女学院の講堂に、法主上人、堀御隠尊猊下、堀米尊能師ほか数名の御尊師のご臨席をあおぎ、学会の精兵は集いよって壮大にいとなまれたのである。

発迹顕本せる学会は大聖人のお声のままに大大活動にはいったのであるが、前述の多難はまた覚悟のうえであるが、われわれがいかにか位が高いかを確信すれば、ものかずではないのである。すなわち、われら学会人の位は、大聖人より次のごとく評されている。

「此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに非ず將た又真言等の諸宗の元祖・畏・嚴・恩・蔵・宣・導等に勝すること百千万億倍なり、請う国中の諸人我が末弟等を軽ざる事勿れ進んで過去を尋ねれば八十万億劫に供養せし大菩薩なり豈熙連一恒の者に非ずや退いて未来を論ずれば八十年の布施に超過して五十の功德を備う可し天子の襁褓に纏れ大竜の始めて生ずる如し蔑如すること勿れ蔑如すること勿れ」（四信五品抄 御書全集三四二ページ）と。

この御真文を拝しえた学会人は、偉大な自覚に立ち、東洋への広宣流布を大願としたのである。

しかも、立宗七百年を迎えるにあたり、一大決意のうえ、実践運動にとりかかった会員は勇氣に満ちみち、一糸乱れざる統帥のもとに、嚴たる組織のうえに、足並みそろえて大折伏に行進しだしたのである。創価学会のごとき団体が、過去七百年の間に、どこにあったであろうか。各理事、各部長の勇敢なる闘争心、つづく負けじ魂の各会員、講義に、折伏に、火の玉のごとき状態である。

時は、まさに来れり。大折伏の時は、まさに来れり。

一国広宣流布の時は、まさに来れり。

いな、いな、東洋への流布の時が来たのである。